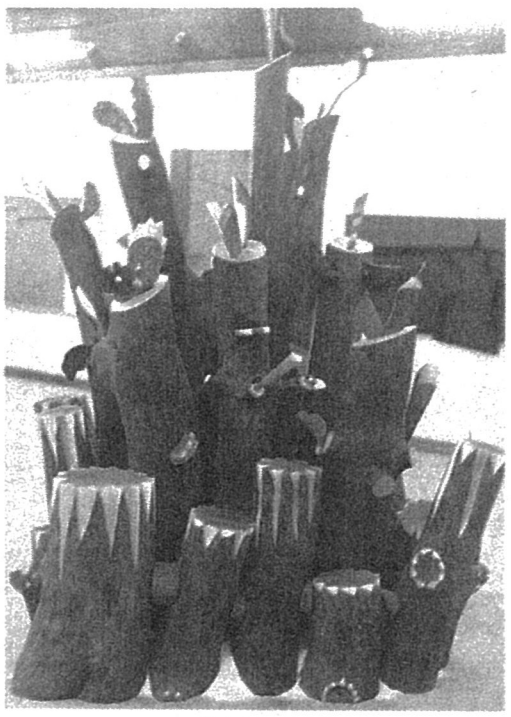
美術月評

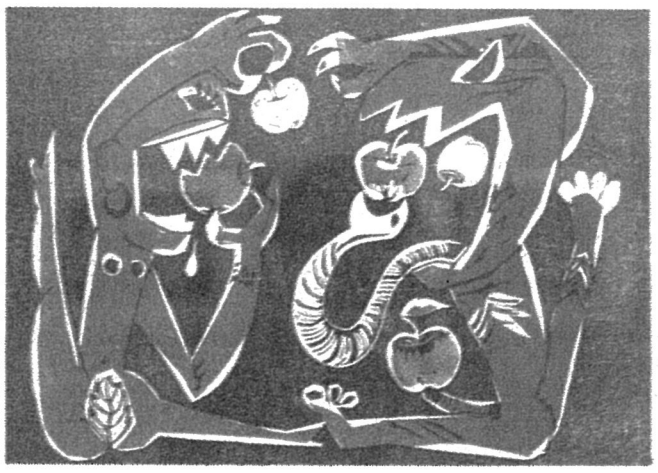
〈10月〉

稲嶺成祚

十月は海邦国体で島中が沸き返った。こうしたフィバーぶりをよそに、町の画廊では美術家たちのいつもの平静さで作品の発表が行われた。



能勢裕子作品



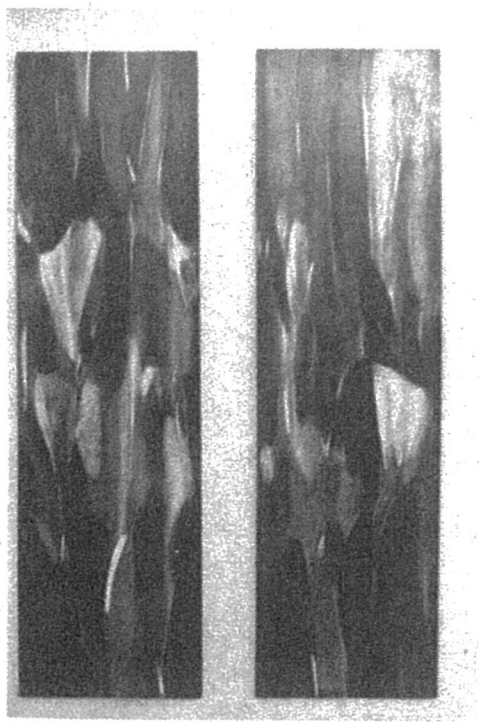
高橋渉二作品

強く伝わるアイロニー…高橋

暖色使い温和な画面に…玉城

美術アート

オブジェに挑戦…「方の会」



永津禎三作品

【金城明一展】　大嶺政寛ところまで、近づいた構図を氏をはじめ、赤瓦の屋根の沖とる。俯瞰（ふかん）して得縄的風景を描く画家は多い。られる赤と緑の美しい村落の金城もその一人だが、他の画全貌ではなく、人々の暮らし家たちが赤瓦の家を通して、が目の当たりに見られ、聞きかつての沖縄の牧歌的な良さとれる所まで近付くのであを示すのに対して、金城は庶る。とはいえ、最近の金城の民の暮らしの場としてのそれ仕事は次第にモチーフを中景を描く。したがって遠望せず、に置くようになった。画面にそこの住人の声が聞き取れる空間が導入され、主題と作者に距離がでてきた。奔出する感情を直接的に主題にぶつけるのではなく、距離を置いて、造形的に思索する傾向が出てきたということかもしれない。

【赤嶺正則新作展】　人物画一本やりの作家である。今回も女性の肖像画を中心として、琉装の女性、バレリーナなどがテーマ。そっと話しかけ、うつむき加減にかすかに答える二人のバレリーナ、髪を直す手の下から、緊張した表情で鏡を見つめるしぐさなど、姿態や顔に表情がでてきたように思う。

【玉城栄一油絵展】　玉城も人物画の得意な作家の一人である。暖かい色を多く使い、ふくよかなタッチで、温和な画面を作る。今回は得意な人物画が二点のみで後は静物と風景。静物は背景の構成が単純に過ぎ、風景は名渡山氏の画風をほうふつとさせる。もっとユニークさが出てくるとよい。

庶民の暮らしの場描く…金城

洗練された版画の世界…翁長

中島イソ子作品

【第二回　方の会】　レギュラーのメンバーが佐野順、高木栄一、永津禎三の三人で、地元からのゲストとして能勢裕子が参加した。

佐野は、厚紙をしわしわにし、上から塗料をふりかけたような仕上げをしている。高木のクールさの中間的仕事といえる。地層の断面を思わせる累々と重なり合う形の表現には、細い線を随所に混じえながら、しっかりと塗りあげるホットな表情が見える。

高木栄一は、平明な色面の輪郭を細木による角が唐突に切り崩し、それによって形としては完結しない四角形や三角形をイメージさせつつ、あいまいな。

能勢裕子の仕事では、黒く塗られた丸太を寄せ集め、その切り口に木の年輪にも似た木片が差し込まれ、ほのぼのとした色がつけられた。装飾的で愉快な植物たちといった感じなのである。壁にかけられた他のメンバーの作品が、それぞれのやり方でオブジェ化する中で、能勢の大きな立体作品はイメージの世界へと飛翔するのである。

【高橋渉二版画展】　黒白のリノカット、厚紙による紙版、フリーハンドの線を生かしたスタイル、あるいは木版と孔版の併用による作品など、いくつかの版種や表現のスタイルがあった。一般に版画家や画家は、一つのスタイルでその造形的可能性を追究するものであるが、詩人である高橋の場合、エロスを核として、その表現手段としての造形なのである。画面にギザギザの線が多用されており、それが辛らつなアイロニーや力強さを担っているとみた。

【翁長自修版画展】　銀色を基調にして、それに朱、緑、黄、紫などの一色を配しての二色刷り版画。銀のもつノーブルな感じを巧みに利かした配色と波状のさまざまなバリエーションの工夫で瀟洒（しょうしゃ）な雰囲気をかもし出す。手描きの面白さを保ちながら、その生々しさを版を通して巧みに押さえ、完成度を高める手法に翁長ならではのさえをみせた。

【中島イソ子個展】　背景を暗くし、その前に屹立する人物像を描く。背景の暗さと人物の静止して観者を凝視するポーズが、作者の内面凝視を投影し、中島の人物画の特徴をなしている。

その他に、二科会沖縄支部展、稲富民子展、赤嶺芳乃絵画展、百名えり子個展なども見たが、紙面の都合で割愛する。

変わった展覧会としては、故宮博物院複製文物展、沖縄近代の絵画特別展、シャガールと世界の版画展、米倉斉加年絵画展などがあった。八重山では「色彩の世界　宮良信」が開かれ、砂川哲雄氏が紙上で紹介した。

（琉大教授）

姿態や顔に表情…赤嶺

内面凝視の人物画…中島

翁長自修作品

金城明一作品